

## 天下泰平をささえたヒト・モノ・コトーイラストを利用して

大阪府 公立中学校教諭

## 1 はじめに

「社会科中学生の歴史 初訂版」p.114～123には、「天下泰平」の世の中にいたる経過が説明されている（現行本の最新版では、p.118～123）。「商品経済の発達」から「流通体系の整備」を個別に扱うのではなく、「天下泰平」の社会をもたらした要因として、それぞれが関連性をもったものとして扱っている。その内容や関連性を一枚の絵に表したのがp.112～p.113の「タイムスリップ」のイラスト（下記）である。



ここには「天下泰平」時代の学習の主要な事柄が描かれている。そのことを分析し、授業実践を提起するのが小論の目的である。まず、どんなヒト・モノ・コトが描かれているのか？

- ① 流通をささえた交通の体系やモノ  
弁財船（大型商船）五大力船（中型貨物船）  
伝馬船（大型船から河岸まで荷物を運ぶ）  
大八車（荷車）ほてふり（路上の物売り）  
飛脚
- ② 衣食住 遊びに関するヒト・モノ・コト  
かわらの家 屋台 木綿の着物 飴細工屋  
二八そば 酒 屋形船での船遊び  
角兵衛獅子
- ③ 江戸の火事に関するモノ  
土蔵づくり 瓦ぶき 防火用水 火の見櫓

## ④ 参勤交代の様子

## 2 &lt;導入&gt; どんな人がいるのだろう

このイラストは、下り酒の廻船が入港した場面である。これは、西宮や大阪からの新酒を江戸に運ぶレースで、年に一度の華々しい行事であった。そのため、船員、酒屋関係者などが多く描かれている。ちなみに新酒番船の一着の平均航行日数は約6日であった。導入は、このイラストに描かれている職業を考えさせることである。そこで、以下の人に○をつけるよう指示をする。できれば、どの班がもっとも早く見つけられるか競争させて

もよい。

「飛脚」「飴細工屋」「そば屋」「ほてふり」「役人」「船頭」「角兵衛獅子」「乞食」「運搬業者」など

興味をもちそうな内容については、次のような発問をし考えさせる。

【飛脚】「飛脚はなぜ早い？」（街道の宿場から宿場へバトンタッチしながら運ぶ便で東海道を6日から8日で駆け抜けた。）「飛脚になるための試験は」（ひもを腰にくくり付けて走り地面につかないか）「家まで手紙を届けてくれたのか」（神社や寺にとりにいった）

【そば屋】「つゆの醤油はどうしたのか？」（後の授業で）「二八そばの価格はどれくらいか？」（16文で400円程度）

## 3 &lt;展開1&gt; 天下泰平時代を概括する

このイラストから、天下泰平時代の概括をしていく。近世には現代と共通するようなさまざまな生活がうまれていた。そのことをふくめこの時代の様相をイラストから考えていく。イラストを使った授業の成否は発問の切れ味がすべてである。

### <発問例>

- ① この絵の季節はいつか
- ② 武士に○をつけよう
- ③ こんなに多くの人が住んでいたのか
- ④ 男と女どちらが多いか
- ⑤ 店では何が売られているか
- ⑥ 家の屋根は何で作られているか
- ⑦ 家の中はたたみか？ 板敷きか？

人々の服装が季節を判断する基準になるが、新酒が入港した時期であるから秋だろう。18世紀半ばの人口は約2400万であるが、17世紀前期からの約1世紀の間に人口は2倍以上になり、この増加は封建社会にあっては異例の増加率である。このことは、その人口増加をささえる食料生産の増加があったことはいままでのない。1721年の全国人別改によると、町人の人口は男が32万3285人、女が17万8109人だった。また、町人だけでみても女の人口は男の半分程度で、全体からすれば4分の1にも満たない。そして、元禄時代は、現代と共通する生活スタイルが確立した時期でもあった。このイラストからいえば、「着物」「茶屋といわれる料理屋」「瓦葺の家」などで、描かれてはいないが、住宅がたたみになり灯火が用いられ、綿入れの布団や座布団が使われた。このような状況を通じて、「元禄の繁栄」を学習する。

## 4 <展開2> 商品作物と流通

現代と共通するようなきまざまな生活が生まれてきたのは、商品経済の発達によるところが大きい。米麦や豆などの<米穀中心の農業>から、木綿・菜種・藍・茶などの商品作物を栽培し、大量の肥料を投入する<商業的農業経営>になっていった。それにより、各地でつくられた商品作物を輸送する水陸交通が盛んになった。とくに、大量の物資を安価に運ぶ水上交通が栄え、日本海沿岸をまわる西廻り航路や主要な河川は多様な船がゆきかっつた。そして都市は、これら流通の拠点としてにぎわうが、この歴史の転換点ともいべき状況を、このイラストから読み取ることが大切である。

### <発問例>

- ① どんな服装をしているか
- ② どんな色の着物を着ているか
- ③ 着物を染める染料はどうしたのか
- ④ 夜の灯りはどうしたか
- ⑤ 右上の大きい船が「弁財船」といわれる。この船の特徴は何か
- ⑥ いろいろな船があるが、それぞれの船の用途を考えよう
- ⑦ 酒はどこから運ばれてくるのか
- ⑧ そばつゆの醤油はどこから運ばれてくるのか
- ⑨ 「くだらない」の言葉の由来は

日本で綿作が行われるようになったのは15世紀末から16世紀中ごろといわれ、それまでは木綿は朝鮮や中国からの輸入品であった。しかし、保温性に富み、吸湿もよく、染色しやすく丈夫な木綿は、ほぼ1世紀の間に寒冷地をのぞき全国にひろがる。しかし、木綿は肥料を多く必要とし手間のかかる作物であったので、経済力の高い畿内や東海地域で商品作物として生産された。この内容については、教科書p.115の⑥藍の収穫のイラスト、⑦綿と藍の産地の地図、⑧綿を買いに来た商人の絵から確認する（最新版p.119）。

教科書p.118の「歴史の舞台⑤」（最新版p.122）には、最上地方の紅花が紹介されている。そこには、運搬の経路も書かれており、東北地方と江戸・大阪のむすびつきや、華やかな赤の着物の発祥の地がわかる。また、藍染の染料は京都の九条や大阪南郊、そして阿波の吉野川を原産としていた。このように、商品作物とその運搬をてがける水上交通の整備により、日本全体を結ぶ流通体系ができてきたことの意義は大きい。この中で、運搬のもっとも大きい役割を果たした船舶が「弁財船」である。これは、江戸時代の大型船の一種で船走の早さが特徴とされた。「より多く」「速く」「少人数で」が海運経営の理想だが、江戸時代の経済的發展も船の輸送力なくしては実現不可能だった。酒やしょうゆそして塩などの特産物については教科書p.115の⑨に「各地の特産物」（最新版p.119）が一覧表になっているので確認しておく。

「くだらない」の語源は、当時は京都が都だったので「京へ上る」「江戸へ下る」と表現した。「下り物」は高級ブランドで、「くだらない」は「下り物でない」の意味である。

## 5 <展開3> 天下の台所「大阪」

教科書p.113の⑤には「にぎわう大阪の船着場」という絵巻物が掲載されている。ここには各藩の蔵屋敷のまえに多くの帆船が停泊している様子が描かれている。教科書p.117の大阪の記述（最新版p.120）と⑥の蔵屋敷の絵を参考にしながら学習をすすめる。現在の<大阪の地図>を使いながらの興味深い学習も可能である。

### <発問例>

- ① 次の大阪地下鉄駅名の由来は？  
「肥後橋」「阿波座」
- ② 大阪には「土佐堀」「江戸堀」などの地名がある。この由来は？

大阪は天下の台所といわれ、各藩の年貢米や商品作物を売るための蔵屋敷が作られた。「肥後橋」は肥後藩、現在の熊本県、そして「阿波座」は阿波藩、現在の徳島県の蔵屋敷がおかれていたので、その名が残っている。また、「堀川」は、船が入りをするために作られた運河だった。これは、あくまでも大阪の地名の由来であるが、各都市の地名の由来をひもとくことで、地域から江戸時代の様子を垣間見ることができる。

## 6 <テーマ学習> 江戸の街から興味あるテーマ学習へ

タイムスリップには、参勤交代、防火対策なども描かれている。また、これだけの人口をささえていくための環境対策が教科書p.123にはイラスト



ト入りで楽しく記述されている。

当時の江戸は、1877年来日したアメリカ人E.モースが『日本その日その日』で「これ（糞尿）を大切に保存し、そして土壌を富ます役にたてる」と絶賛しているように国際的にも先進的なエコ都市だったのである。また、これだけの人口をささえる神田上水などの水道網が開発された。水道に遠かったり、掘り井戸の水質に恵まれない地域には、水売りが飲料水を売りにまわった。このような興味ある都市問題の発展学習が調べ学習を通じて可能である。

<テーマ学習例> 紙数の関係でヒントのみを例示

【参勤交代】「何人くらい参加したのか」「何日くらいかかったのか」「どんなかけ声をかけて歩いたのか」「宿代はどうしたのか」「なぜ参勤交代をしたのか」

【防火対策】「江戸の火事はどれくらいあったのか」「め組って何？」「臨機応変に起床するための方策は」「イラストの中の防火対策の方法は」

【リサイクル都市】排泄物を肥料として有効利用、割れた茶碗の修繕、古着の再利用、反故紙を襖の下張りにするなどのリサイクルが行われた。ゴミは永代島まで運ばれ処理された。

【江戸の上水道】水道橋（水道の橋）、井の頭（江戸全体の井戸の頂点）、関口（堰の口があった）などの興味ある地名の学習

## 7 おわりに

一枚のイラストをつかった授業内容を構想してみた。「暗く」「取奪に喘ぐ民衆」という江戸時代認識を転換し、都市の繁栄をささえる農村での商品作物の生産、各地での特産物、そしてその流通になった交通体系の整備など、生き生きと躍動感のある江戸時代認識が大切である。一枚のイラストは、学習意欲のない子どもを授業に位置づけ、大きく時代の認識を変える、すばらしい教材である。

<参考文献>

武田太郎『目からウロコの江戸時代』PHP  
『週刊朝日百科 日本の歴史』68 86 朝日新聞社